

ダンボールコンポストQ&A

Q 1 ダンボールコンポストでの堆肥化が失敗しない方法はなんですか？

A 1 好気性菌（空気が好きな微生物）の働きで生ごみを分解するため、第一に全体を良くかき混ぜる（空気を入れる）こと、第二にある程度（60%くらい）の水分量を保つことがコツです（微生物が活動するため酸素、水、食べ物が必要）。

乾き過ぎると分解しません。

また、箱に隙間がないようにテープでしっかり目張りし、布カバー等をきちんと取り付けることで虫の侵入を予防します。箱の下には、スノコなどで浮かせると通気性が保てて床が湿るのを防ぎます。露天は避けて、雨の当たらないところにおきましょう。

Q 2 虫が湧いてしまいました。

A 2 カバーや箱のつなぎ目に隙間があると、中に虫が侵入・産卵し繁殖します。

テープでよく目張りして、布カバーでしっかり覆いましょう。虫が湧いても害はありませんが、気になるようでしたら使用済みの天ぷら油（頻繁にいれないこと、1度に200cc以下）、米ぬかなどを入れると堆肥温度が上がり、虫が発生しにくくなります。

アメリカミズアブは、水気が多くなり「腐敗」に傾くと出やすくなります。良く混ぜて堆肥に空気を送ってください。

虫に卵を産ませないように、布でカバーするなど工夫しましょう。また、卵や幼虫を見つけたらすぐに取り除いてください。

虫が減らない場合はポリ袋などに中身を移して密封し日に当てます。死んだ虫は取り除くか、そのままでも微生物が分解します。

Q 3 基材（土）の温度が上がりにません。どうしてですか？

A 3 良く混ぜることが大切です。最初の2・3週間はなかなか温度が上がりにませんが、20度くらいでも分解はゆっくり進んでいます。早く温度を上げたい場合は、廃天ぷら油など油分の多いもの、米ぬか、魚などのたんぱく質、納豆、糖類などを入れると良いです。全体を一回り大きい箱に入れ、箱を二重にするのも外気の影響を受けにくく保温され効果的です。

また、乾燥していると分解が進まないなので、お米のとぎ汁や水を足して水分調整してください。（ダンボールの側面に直接水がかからないように注意してください）

Q 4 カビが生えてしまいました。どうしたら良いですか？

A 4 基材の表面に白いカビが生えることがあります。分解を助けてくれるものなので心配いりません。堆肥の中へ混ぜ込んでください。

Q 5 堆肥がべたべたで水っぽくなってきました。

A 5 生ごみの水分をよく切るか、生ごみの投入をやめます。また毎日よく混ぜてください。ひどい時は基材や米ぬかなどを加えて水分調整してください。温度が上がると、どんどん蒸発して乾いていきますので、全体を良く混ぜてなるべく良い状態にもっていくように努力してください。

終盤：開始から3～4ヶ月でこのような状態になり、温度が上がらなければ終了のサインです。生ごみの投入はやめて約1週間かきまぜます。その後、同量の土と混ぜ約1ヶ月寝かせます。

Q 6 臭いが気になります。

A 6 高温になった時、お魚など動物性たんぱく質を入れた時は、臭いがきつくなります。かんきつ類の皮（防腐剤無し）コーヒーかす、お茶がらなどを入れると臭いが和らぎます。お魚のアラは、熱湯をかけるか一度火を通してから入れると臭いが抑えられます。

Q 7 ダンボールの中に入れてはいけないものはありますか？

A 7 基本的には生ごみであれば何でも大丈夫ですが、鶏の骨や貝殻などは分解されにくいため、長い間かたちが残ってしまいます。生ごみの量は1日0.3～0.5kgが目安ですが、一次的であれば0.5kg以上入れても大丈夫です。

また、細かくすれば早く分解されるので多く入れられます。食べ残し、塩分の多いものも大量でなければ大丈夫です。

(分解しづらいもの 貝殻、動物の骨、魚の骨、トウモロコシの皮、たまねぎの外皮、輸入柑橘類の皮<防腐剤がついているため>) など

Q 8 どのくらいの期間使用できますか？

A 8 投入する生ごみの量にもよりますが、3ヶ月から4ヶ月ぐらいまでが目安です。(総投入量で30～40kg)。「べとついて混ぜづらくなってきた。」「温度が上がらなくなってきた。」など、今までと違うサインが現れたら更新しましょう。次のダンボールコンポストには、前回の堆肥を1/3ほど加えて始めると最初の時よりも早く分解が始まります。ダンボール箱は、使用状況や強度によっては、1ヶ月ぐらいで取り換えたほうが良い場合もあります。

二重の丈夫なダンボール箱(みかん・りんごの箱)を使えば、かなり長持ちします。

Q 9 できた堆肥はすぐに使えますか？

A 9 1ヶ月くらい熟成させてから使う方が良いでしょう。箱のまま熟成させるときはたまに全体を良く混ぜてください。ダンボールコンポストから直ぐに使用したい場合は、プランターの底に生ごみ堆肥を入れ、上に黒土などの普通の土を敷き、種を蒔くというやり方で使用してみてください。

また、市販の培養土などに混ぜても使用できます。

Q10 旅行に行く場合1週間程度お休みしても大丈夫ですか？

A10 2～3日でしたら問題ありません。長時間留守にする場合は雨の当たらない風通しの良いところに置きます。少しずつ温度が下がり、休眠状態となります。再開するときは乾燥しているので、水分や米ぬかを与えてよくかき混ぜてから再開しましょう。

Q11 なぜダンボールを使うのですか？

A11 生ごみを分解する「好気性微生物」の活躍には酸素を必要とします。ダンボール箱は、箱全体で呼吸し、ある程度水分調整ができ、かつ外気温の変化の影響も少ないため理想的な素材です。

Q12 基材が乾燥しているようですがどうしたら良いですか？

A12 水分調整が必要です。内部がしっとりと湿り気を保っているのが最適ですが、水を加える際は一度に多量に加えず、少しずつ加えるようにしてください。米のとぎ汁なども良いです。

Q13 ダンボールの底板の外に新聞紙を敷いた方が良いですか？

A13 底板の上に新聞紙を敷いたほうがダンボールの補強になります。底を破らないように注意しながらよくかき混ぜてください。

Q14 最初の基材の量はどのくらいですか？

A14 ピートモス約15リットル、くん炭約10リットル（3対2の割合）で投入してください。

Q15 米ぬかを入れる場合はどんなときですか？

A15 米ぬかは発酵を促進させるものなので、ダンボール内の温度が低い時に、カップ1～2杯程度を加えてよくかき混ぜてください。

Q16 塩分の多い食べ残しも大丈夫ですか？

A16 通常のご家庭の量で、常識の範囲内でしたら問題ありません。

Q17 ダンボール内の温度があまり上がりません。失敗ですか？

A17 温度はその時の状況で上下します。低温度でも分解は進んでおります。2～3週間は上がらないこともありますので心配いりません。

Q18 廃油はどの程度加えれば良いですか？

A18 200CCくらいを目安に入れてください。
(油類をあまり入れ過ぎると臭くなるので頻繁にいれないようにして下さい。)

Q19 2・3日留守にしていたら、白いカビが一面に出ていました。失敗ですか？

A19 白カビが発生するのは、微生物が活発に働いており、良い状態のしるしなので心配いりません。良くかき混ぜてから再開してください。

Q20 大きい生ごみは小さく切ってから入れるのですか？

A20 なるべく小さく切ってください。小さくした方が分解速度は早まります。

Q21 ダニのような小さい虫が表面に大量に発生しました。どのように対処したら良いですか？

A21 乾燥気味で、温度が上がらないときにダニが発生することがあります。
発生した時は、早く温度を上げて、虫が成育できないようにすることが一番好ましいです。対処法は廃食用油、米ぬかなどを入れることで、温度を上昇させ、40度以上の温度を持続させることで、ダニ等を死滅させることができます。

Q22 温度計は必要ですか？

A22 分解の目安になるので、あった方がわかりやすいです。
微生物の活動状況は目で見ることにはできませんが、ダンボール内の温度を測ることで確認することができます。

Q23 ダンボールコンポストはどのような場所に置けばよいですか？

A23 雨がかからなければ屋外でも屋内でも設置可能です。
風通しの良い場所を選んでください。

Q24 ダンボール箱より丈夫なプラスチック容器等で組みたいのですが。

A24 好気性微生物を利用するためには通気性を良くすることが重要です。
プラスチック容器では空気を通さないため、好気性微生物による分解ができなくなってしまいます。

Q25 ダンボール箱が水分で弱くなってしまいました。交換したいのですが。

A25 身近にあるダンボール箱で構いませんが、みかん箱など比較的頑丈なものがお勧めです。

また、大きさの違うダンボール箱を二重にすると強度が増し、保湿性も高くなります。

Q26 自由研究の事例はどのようなものがありますか？

A26 ダンボールコンポストに生ごみを入れることによって家庭から出るごみをどのくらい減らすことができるのかという事例や入れる生ごみの種類や量によってどのようにダンボールコンポストが変化するのかという事例等があります。

インターネットにも多くの事例がありますのでご参考にしてください。

Q27 ピートモスとは何ですか？

A27 土壌改良剤です。湿地の水苔が堆積し、泥炭化したもので、土壌を酸性化させるために使います。

Q28 くん炭とは何ですか？

A28 土壌改良剤です。モミガラをいぶし焼して炭化したもので、土壌をアルカリ性にするために使います。消臭の効果等もあります。